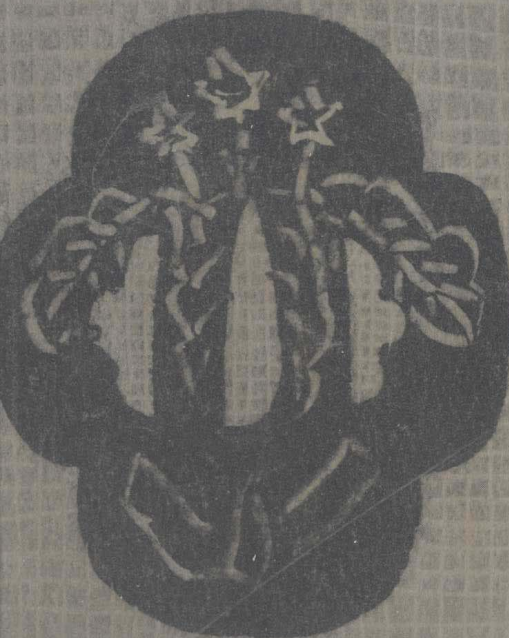


傳豪劍新續

秀義山中

新潮社版



小説文庫

續 新 劍 豪 傳

中 山 義 秀

新 潮 社 版



—小説文庫—

★續新劍豪傳★

定價 一三〇圓

一九五六年四月三十日 發行
一九五六年十一月十五日 四刷

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

印刷者 佐藤精亮

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一

電話東京三四局代表七一(八)

振替東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷 二光印刷株式會社・製本 憲專堂製本所

(c) by Y. NAKAYAMA 1956, TOKYO printed in Japan.

目次

小野治郎右衛門忠明	五
白菊の塵	
花影欄にのぼる	
林崎甚助重信	五九
花月夜	
春雪	
岐れ路	
★	
富田勢源	一三五
齋藤節翁	一三七
山岡鐵舟	一四八

隨筆

刀の花實……………一〇

鹿島の祕太刀……………一七

新陰月の祕抄……………一九

裝幀 杉本健吉

續
新
劍
豪
傳

小野治郎右衛門忠明

白菊の塵

一

神子^{みこ}上典膳、後の小野治郎右衛門忠明は、小幡勘兵衛^{かげのり}景憲の推薦で、徳川秀忠の家臣となつた。

組は秀忠の身邊を護衛するお側衆で、秀忠の劍道指南役をかねてゐる。采邑は二百石、知行地は下總の國^{くに}埴生郡^{はにふ}寺臺村にあつた。今の千葉縣成田町寺臺である。

そこはもと里見安房守の族、海保丹波守の領地中の一部だつた。海保は里見氏が小田原の北條氏にやぶれた後、北條氏にしたがつてゐたが、北條氏が倒れたので、その屬領は徳川のものになつた。

表高は二百石だが、實收は三百九石餘あつた。典膳は上總の國朝夷郡神子上村、今の千葉縣安房郡丸村の生れであるから、おなじ房總のうちに領地をえたことになる。

屋敷は駿河臺にあたへられた。そこから馬で城内に出仕する。若黨、中間、小者をひきつれ、

堂々とした旗本ぶりだ。師匠の伊藤一刀齋にしたがつて、小野善鬼と一緒に諸國をめぐりあるいてゐた修業時代にくらべると、隔世の感がある。

典膳は善鬼を仆してから 人が變つた。内部に不拔の自信と、何物もおそれない勇氣をえたのである、彼は少年時代から武技が好きで、三神流と稱する刀槍の術をまなび、猪勇をほこつてゐたが、一刀齋にであつて驕慢の鼻をくじかれた。

それから十餘年、廻國修業の功をつみ、天下無敵を自負してゐた善鬼にうち勝つて、はじめに劍の極意をさとつた。齡も三十一、二歳の男盛り、圓熟の境にたつたといふべきである。

典膳は勝負の道をすてて姿を隠してしまつた師匠と反對に、生涯を兵法をもつてつらぬかうと決心してゐる。それが眞に師匠の衣鉢をつぐことであり、また彼に授けられた使命のやうにも感じてゐる。武士たる者の宿命なのだ。彼にとつて他に、どんな生きる道があらう。

このやうに覺悟した典膳は、まさに武道の鬼であり、權化のやうなものであつた。彼はこと武道に關するかぎり、何者とも妥協せず何事も假借すまいと處世の態度をきめてゐた。

典膳は頬のゆたかな丸顔で、兩眼ほそく色白であるため、一見して武藝者のやうには見えない。結んだ口もとが今にもにこにここと、笑ひだしさうな愛嬌がある。つまり、いくらかおどけたところのある童顔なのだ。大黒天の顔をもうすこし、ひらべつたくしたやうな感じである。そのやうな柔和な顔つきをしてゐて、ひとたび劍をとると鬼になる。それだけに、彼の技倆は底が知れない。

その測り知られない典膳の技倆を、あへて測らうとしたものがある。數多い兵法者の中から、

秀忠の指南番にえらばれた神子上典膳とは、はたしてどれほどの者か。これは誰しも、知りた
いところであらう。

徳川四天王の筆頭、井伊直政の家中には、武勇に名をえた者が多い。家康は直政が萬千代と
いつた時分から彼を寵愛して、天正十年武田勝頼がほろんだ折、その遺臣を多勢ひきとつて萬
千代の麾下につけた。そして戦の時にはいつも、この井伊の兵を先鋒にして軍功を上げませた
から、おのづと精強の士が多くなつた。

直政の近習の間で、典膳のことが噂にのぼつた時、彼の手筋を見たいと云ひだした者があつ
た。木崎兵吾といふ壯士である。近習衆は主君の警固役だから、腕つぶしの強い者がそろつて
ゐる。戦の場敷を踏んで殺戮をほこり、怖さといふことを知らない。

直政は木崎の希望を聞くと、

「それは面白い。兵吾、そちは典膳と立合つてみるか」

「兵法の術は戦場の働きとは、また違つたところがあるさうですが、勝負の道は一つ。およば
ずながら、彼の手のうちを試してみるのでござりませう」

「では早速、典膳をわが屋敷へ、呼ぶことにいたさう」

井伊の屋敷へ招かれてきた典膳にむかつて、直政が云つた。

「若殿の御指南番にえらばれたとは、名譽のいたり。さだめし、兵法の奥義に達してゐること
であらう。我が家中に、その方の妙術をみたいと願つてゐる者があるが、一見することは叶ふ
まいか」

四天王筆頭の十萬石の城主でも、秀忠の指南役にたいして、一應の敬意は拂つてゐる。典膳は直政の言葉の裏を察して、

「は、ア、さてはわが技倆のほどを、ためす心得とみえる。よき機會、井伊の家中に、一刀流の實をしめしてやらう」

典膳は愛嬌のある丸顔に、微笑をうかべて、

「戦場の働きにくらべれば、刀術は泰平の餘技のやうに思はれてをります。武功者の多い御家中の方々にたいして、組太刀の作法をしめしても詮ない仕儀。試合によつて、劍技の優劣をためせば、一目瞭然。しかるべき立合の士を、お選み下さるやう願ひあげます」

典膳は云ふべきことを、はつきりと云つた。勝負道をもつて、一生をつらぬかうとしてゐる彼には、言葉の飾りや他人への顧慮はいらなかつた。たゞ奮進、もつて勝を制しさへすればよいのである。

典膳は書院前の芝生の庭で、木崎兵吾とたちあつた。書院内にある井伊直政の左右から縁側の上、庭の芝生のまはりに、直政の近臣や家中の侍達が、びつしりと重なりあつて見物してゐる。

そればかりか屋敷奥の座敷窓や、廊下の境戸などをほそめにすかして、多勢の女中衆までが忍び忍びに、試合場の様子をうかがつてゐる。武張つた時代なので、女中連もかういふことに興味をもつらしい。

典膳と兵吾の前に、三尺あまりある同じ長さの木刀が、二振りならべおかれた。それを取ら

うとして、右手をのばした兵吾にむかひ、典膳が靜かな聲で云つた。

「そこもとほまこと、我らと立合はれる覺悟でござるか」

主君をはじめ衆人の見てゐる前で、典膳からさう云はれ、木崎はむツとしたらしく、

「いかにも。立合は拙者からして、望んだことでござる」

すると典膳の柔和な顔つきが、陽のかげるやうに異様にかはつてきて、

「みづから望まれたとは、酔興もほどによる。兵法の修業は、酔興ではいたさぬ。怪我^{けが}されても、我らを恨まれるな」

「云ふにやおよぶ」

怒つた兵吾が木刀をむづと擱んだ瞬間、典膳は六尺後に飛びさがつた。見ると木劍を、逆手^{さかて}に握つてゐる。あわてたからではない。わざとさうしてゐる證據には、兵吾が木刀を青眼にかまへて、ジリジリと詰寄つてくるにたいして、典膳は右手に木刀をさげたなり、防禦の構へもせず、仁王立ちに突立つてゐることわかる。

典膳は眞劍をふるつて、戦の場敷をふんだ相手を、てんで問題にしていないうである。木刀の柄は一尺二寸ばかりある。その長さをもつて、兵吾の三尺餘の木劍を、あしらはうといふのであるから、相手を侮辱すること甚しい。

兵吾は憤怒に、顔が青くなつた。典膳が自分に怪我させるつもりならば、彼は相手を一撃のもとに打殺してしまふ決心をしてゐる。典膳が秀忠の指南役であらうと、武士にたいする侮辱はゆるせなかつた。

これで試合は、眞劍勝負と變りないことになった。二人は手拭で鉢巻をして、襷を十字に綾どつてゐる以外、防具は何もつけてゐない。全力をこめてうつ木刀が若し身にあたれば、腦天は砕け骨は折れてしまふであらう。

雙方のかうした恐しい氣魄に、見物の人々がヒタと鳴りをしづめ固唾^{かたづ}をのんでゐる時、兵吾の喉がやぶれたかと思ふばかり、「やア」といふ咆哮の叫びと共に、駈けあがつて典膳の胸の水月に突きを入れた刹那、彼の木刀が宙天にはね飛び、兵吾は兩腕をだらりとさげたまゝ、仰向けにぶっ倒れて氣絶してしまつた。

「見えたか」

さう聲をかけた典膳は、いつの間にか木刀を普通に持ちなほしてゐる。彼は逆手に握つた木刀のつかで、兵吾の太刀を空に拂ひあげるやいなや、たちまち太刀をとりなほして、兵吾の兩腕を打ちひししいでしまつたものらしい。兩腕が利かなくなれば、死人も同然だ。

兵法の至極は、早業^{はやわざ}にきまる。鍛錬の極みとはいひ、何といふ手練であらう。見物の家臣等があまりの神妙術に、啞然としてゐると、典膳は昏倒してゐる兵吾の姿を、上から覗きながら、「氣の毒に、腕が折れたであらう。もはや、使ひものにはなるまい」

彼は問題にしてゐなかつた相手を撃つにも、やはり渾身の力をふるつた。兵法はつねに命がけ、酔興でないといふのは、この心得をさしたものに違ひない。

典膳は師の伊藤景久に云はれたやうに、一刀流の興廢は、自分の雙肩にかゝつてゐるといふ責任を、つねに自覺してゐる。又、秀忠の指南番であるといふ自負も、心から離れたことはなかつた。それで劍の道にかけては、誰にも一步も譲るまいと研磨を怠らなかつた。

元來が人に負けることの嫌ひな、はげしい性格である。師について修業中はみづから謙抑して、ひたすら斯道の研鑽と術の鍛鍊につとめた。一刀齋から自立した今は、天下第一人者としての實力と誇りを、堅持しようとする一念に生きてゐる。

典膳は非番の時は、獨身の氣安さにまかせて、同僚の朝倉藤十郎や戸田半平等とつれだつて、江戸市内をめぐり歩いた。

江戸は家康の入國以來、まだ數年にしかならないが、年毎におどろくばかり人家が増えてゆく。もとは江戸莊、櫻田郷、神田郷など二、三百戸の部落にすぎなかつたものが、南は品川から北は淺草の邊まで、町並のつづくやうな勢だ。

中でも賑かなのは大橋(常盤橋)、日本橋、中橋のあたりである。日本橋のたもとには毎日市がたち、諸國から職を求めて人が集まつてくる。江戸城をはじめそこ此處の工事がさかんだから、人夫に雇はれても粥口の道はたつ。

中橋には藁むしろ掛けの見世物小屋があつた。なかに劍術を見世物にして、鳥目をあつめてゐる者がある。いづれ無賴のあぶれ者達なのであらう。

數人の仲間が眞劍をもつて、斬合の眞似事をして見せるのだ。觀る人によつては他愛のないものだが、殺伐な時代なので見物人が集まつてくる。たゞゆるしがたいのは小屋の木戸口に、

劍術無雙の看板をかゝげてその下に、眞劍の立合をのぞむ仁は、なにびとなりともお出あれ、但し斬殺さるるとも、雙方異議なかるべきこと。そんな文句を張出してゐることである。

もつとも、これで見物人を呼んでゐるわけだが、無頼の者共を相手にして、誰も眞劍の立合をのぞむ者はない。數人を相手に首尾よく斬勝つてみたところで、それまでの事である。仕損じて怪我したり、斬殺されでもしたら、それこそ天下の物笑ひだ。

中橋を通りかゝつた朝倉藤十郎は、劍術無雙の看板をみつけると典膳の袖をひいて、

「神子上、あれを見ろ。怪しからぬことが書いてある」

典膳は笑つて、

「見世物なので、大きく出たのであらう。看板にすることだ」

「しかし、眞劍の勝負を望むならば、なにびとも立合ふことわつてある。知らぬならばともかく、眼前にこの張出しをみて、むざと立去ることはなるまい」

さう云つたのは、同じ連の戸田半平。三人ともほゞ同年配で、事あればすぐにも命を投げださうといふ、血氣の荒武者たちである。

「兵法の極意をうるには、眞劍の立合を試みる以上の修業はない。といふのが貴公の持論だ。面白い。見物に入つてみようではないか」

朝倉が典膳にすゝめる。彼等は酒氣をおびてゐた。木戸口で鳥目を拂ひ、小屋中へ行つてみると、中は見物人でいっぱいである。べつに棧敷が設けてある。三人は棧敷にあがつた。

棧敷から場内を見ると、中央に白砂をしきつめ、まはりを木柵で圍つてある。藁蓆の一隅に

幕をはりめぐらせ、その幕をか、げて白刃を右手にさげた劍士達があらはれてくる。

彼等は亂髪の頭に鉢巻をむすび、腹當、草摺ばかりの小具足をつけてゐた。さすが見世物にするだけあつて、行装ものものしく仲々ぬけめがない。

どのやうなことをするのかと思つて見物してゐると、彼等は初めに二人だけで立合つて、打太刀、仕太刀に分れ、眞劍をもつて組太刀の型を見せた。典膳はひとめ見て、彼等が神陰流の型をまねてゐることがわかつた。

神陰流は上野の國太胡の城主、上泉伊勢守信綱から始まつたものである。信綱は初め飯篠山城守入道長威齋の興した天眞正傳の神道流をまなび、のち愛洲移香について陰流の祕奥をきき、神陰流を創出した。

この流は、大和の柳生但馬守宗嚴にうけつがれて、新陰流となつたが、新陰流は當時まだ江戸では行はれてゐない。してみると彼等は上州や武州邊にのこされてゐる、神陰末流の組太刀、五つ六つを見やう見眞似して、その型を演じてゐるのであらう。

眞似事にしろ鐔先き三尺餘の大太刀をふるつて、右めぐり左めぐり、逆風、村雲、猿飛び、燕廻し、浦波などの變化をつくして見せれば、素人ならずとも眩惑されて驚く。最後は數人たがひに入れみだれて亂刃の型を演じ、さながら戦場の斬合を眼前に見るやう、見物人の目をたのしませて一回の打出しとなる。

彼等は劍をたくみに廻して、小具足などをつけてゐるけれども、典膳の見たところ、もとより眞の劍客ではなく、また武士でもなかつた。この時分、江戸から關八州へかけて、盜賊、無

頼の徒が、我が物顔に横行してゐた。

大鳥逸平を盟主と仰ぐあぶれのかぶき者、向坂甚内を頭とする盜賊團、北條早雲以來、小田原、箱根に名高い風魔、らつば者の類たぐひ、これ等は關東の奉行職にある内藤修理、青山常陸介などの手にもなかなか及ばなかつた。

百年あまりもつゞいた戰亂期の產物だから、家康の威力をもつてしても三年四年で根絶できるはずがない。劍術を見世物にしてゐる彼等も、それ等のどれかに屬してゐるものであらう。彼等は人出の多い季節に盛り場にあらはれ、人出のすくない冬の季節には何處ともなく姿を隠してしまふ。

彼等が眞劍をふりまはして、立合を演じてゐる時、大聲で笑ふ者があつた。その笑ひぶりがだしぬけで、しかも傍若無人をきはめてゐるので、場内の見物衆がいつせいに笑聲のある方へ眼をむけた。破太刀の一つ、村雲の型を演じてゐた劍士達二人も、ぎくつとしたていで劍をひき其方を睨んだ。

「は、は、は、くだらん物真似は、やめろ、やめろ。それより早く、劍術無雙といふ太刀筋を見せい」

笑つたのは、棧敷にあがつた典膳等三人だ。叫んだのは、戸田半平である。酔つてゐるので、云ふことに遠慮がない。それを聞いた立合の二人は、くわつとして、

「我等の太刀筋を見たくば、棧敷をおりて、この場へ出られよ。代りに、看板のはり紙は承知か」